

◆ 近畿大会 ◆

「老いの歌」

対談／河野裕子・小池光

なぜ「老いの歌」

小池 皆さんこんにちは。今日は河野裕子さんと、何をしゃべろうかなと思ったら、「老いの歌」がいいんじゃないということでした。

裕子さん、何で今「老いの歌」ですか。

河野 色々な選歌欄の場で見ていると、この頃老いの歌が面白いんですね。老いの歌をつくっていらっしゃる人は、自分の身上に現在進行形として動きつつある老いが大変珍しいんじゃないか。だから老いの歌が多いんじゃないかなということを思ったわけなんです。自分は全然老いだなんて思ってもいないわけだけれど、だけれども昔だと老いですよね、私たち。

小池 もちろん。

河野 じいさんとはあさんですよ。

年をとってきて、だんだん面白い世の中

だよという気がしないですか、小池さんは。小池 まあそう言いたい部分もある……。

とにかく何か一色じゃないという感じはしますね。人間が何かある境を越えていくというところは、決して一つの色では染められないようなものがある。だから、それは面白いと言えば面白とも言えるし、非常に苛酷なものだと言えば苛酷なものだということも正しい。そこに折り畳まれたものが短歌で出てくれば面白い。

河野 人間の「枯れ」を見せてくれるいろんな場面、あるいは自分自身の心の中、あるいは体、そうしたいろんなものが短歌では割と表現しやすいんですね。

小池 では少し、歌を引きながら話してみましようか。

河野 これはよく挙げられる作品です。

十というふところに段のある如き錯

覚を持ちて九十一となる 土屋文明

こういう感じはよくわかります。ともかく十という刻みがあつて年を取っていく。だけれどよく考えてみると、その十という刻みは錯覚でしかないんだよという、言われてみれば全くそのとおりでして。

人はみな馴れぬ齡よちを生きているユリ
カモメ飛ぶまるき曇天 永田紅

ある年齢を重ねた人がつくつたならわかるんですけども、まだ二十歳ぐらいの若い人が「人はみな馴れぬ齡を生きている」という思いを持つんですね。十歳なら十歳、十五歳なら十五歳、二十歳なら二十歳、いろんな年齢になっていくんだけれども、その年齢の居心地の悪さ。不思議なんです、自分が年をとるのが。

小池 これ河野さんの娘さんが二十歳のときつくつたんでしょう。すごい物を見通している。

つまり人間って若いうちは確かに「未知の齡を生きている」という感じは誰でもするんだけども、ある年齢を超えると、未知じゃなくて同じことの繰り返しというか、知っている世界に入っていくような、何かそんなイメージというのを持ってしまふ。

けれども、よく考えるとそうじゃなくて、
どんな人も全く体験しない年齢に入ってい
くだけです。

そういう意味では、どの人間も馴れない、
経験したことの無い非常に未知の不思議な
世界に入っていく、それが人間の一生だよ
ね。

河野 だれもみんな自分の新しい年齢に新
参者として入っていきます。新参者なんで
すね。



斎藤茂吉のうまさ

小池 茂吉の歌って、僕は半分以上は古い
の歌だと思う。広い意味で分けられね。四
十代ごろから、もう私は老人だ老人だとい
う歌を延々とつくってきて、それで最後の
『つきかげ』なんていう歌集は、もう全部老
いの歌だよ。

河野 何で半分以上が古いの歌ですか、茂
吉は。

小池 それは、根本的には何なのかな、や
はり人間の持つて生まれたものというのか
もしれないけれども、ある境遇に対するあ
きらめ、諦観、何か運命として受け入れる
しかないみたいな、そういう中で育ってき
た人間というのは、よく言えば老成とい
うのかな、そういう境地に早く達するんじや
ないかな。抵抗しようがないものを丸抱え
したみたいなことね。自分に対してそれを
老いるという形で、理解せしめようとする
のかな。

河野 そういう諦観ですか、茂吉の中の。
小池 まあそれは一般論ですけれどね。特
に『つきかげ』という最後の歌集は、没後

に編まれた歌集なんですよね、これだけが。
『つきかげ』の歌の面白さは言ってみれば、
『ほけの歌のおもしろさ』というのも変なん
だけれど、普通の、頭が明晰な感覚を持っ
ているときには絶対出てこないような、と
てもない何か飛んでしまった発想の歌と
いうんですかね。天衣無縫というのかな、
そういう歌がばらばらばらと転がってい
るのはおもしろいね。

河野 おもしろいですね。十七冊ですか、
茂吉には歌集がありますけれど、まずみん
な『赤光』『白光』を挙げるでしょう。二
つの峰を言いますけれど、私は『つきかげ』
が一番面白いですね。

小池 『つきかげ』が一番面白い。

河野 何であれがおもしろいんだろうとい
うと、どこかで籠かごが外れるんですね。

小池 そうなんです。これも有名な歌だ
けれどね、

真実の限りといひて報告す部屋の中
にて折々倒る

真実の限りと言つて報告しますよ。だれ
に報告するなんていうことは言わないで
すよ。皆さん方にでもいい、とにかくこれ

が真実というものだ。それは何ですかと
いったら、それは部屋の中で時々パタンと
倒れてしまうことだということだね。

今、うちの母が八十九で一緒に住んでい
るんだけど、母もこういう状態なんです
よ。普通、我々が倒れると手をついたり何
かしますけれど、そういう反射神経がない
から、ただ棒のように倒れるの。この茂吉
の歌はそうなんだ。

河野 なるほど。

小池 部屋の中で折々倒れる、棒のように
倒れる、人間の体が。人間というものの
「真実の限り」というのはこういうものだ
とっている。それは老いの嘆きとか何かを
突破してしまった、その先にある一つの、
ある物質的な存在としての人間の命の究極
の姿みたいなものかな。

河野 まあでも、これは「真実の限りとい
ひて報告す」というのは、いかにも不用意
ですね、表現が。

小池 不用意というか、もう破格の表現だ
ね。

河野 そうですね。だから、これができるの
はやっばり茂吉なのでしょうね、きつと。

小池 そうですね。

河野 「折々倒る」あたりが、なかなか見て
いるわけなんで、小池さんがおっしゃった、
早くからの老いの歌だということについて
は、私もちょっとまだわからないけれど、
茂吉が六十代過ぎて本当の老いの中に入っ
ていったときの老いの歌のおもしろさとい
うのは、自分の老いていく体を自分で観察
しているみたいいな……。

小池 そうそう、そういう面がありますね。

河野 それがともおもしろいんですね。

この体古くなりしばかりに靴穿はききゆ
けばつまづくものを

これも大変有名な歌でありますけれど、
茂吉は大体地下足袋を履いて歩き回って
たんですね。ただ、ちょっとしたオフイシャ
ルな場面なんかで靴を履いていくことが
あったんですよ。「この体古くなりしばか
り」っていう、自分の体を「この体」なん
ていうふうに、ちょっと突き放して言っ
てる。茂吉はやっばりそのつまずいた自分
に、自分が一番びっくりしているんですね。
小池 そうそう、そうだと思いますね。
河野 歯がゆくて、こんなはずはない。そ

れは何でかという、自分のこの体がもう
古くなったばかりにこんな目に遭わな
きゃならない。そういうことを非常に散文
的な言い方で表現しているんですけれど、
なかなか味わいがある、やっばり歌とし
てもうまいですね。

小池 特に「古くなる」というのがね、こ
れが言えそうで言えないですね。まるで何
かの物みたいだね。

河野 やっばり医者として観察しているん
でしょうか。自分の体を。

小池 それもあるし、昔からあの人は、根
本的に自分がもう一つの自分に分かれる人
だからね。

河野 今の文脈から言えば、次の歌もそう
なんですね。

一言ひとこともいふこともなく床とこぬちに「年
ふりにたるかたち」入りぬる

小池 これも有名な歌だけれど、この括弧
内は、何か先例が。

河野 先例による場合、こういう括弧を入
れますからね。いずれにしても、「年ふりに
たるかたち」というのがおもしろい。「体」で
はなくて「かたち」なのですね。形として

自分を把握している。

小池 そうですね。ですが、この二首なんか典型だけれども、どっか滑稽というか笑っちゃうところがある。

河野 笑っちゃうというのは、どうして笑うんですか、茂吉が笑う……。

小池 笑うというのは、ちよつと言い過ぎだけれどね。

河野 茂吉は大まじめじゃないの。

小池 もちろんそうなんだけれど、まあ驚くというかな、笑うんじゃないかって。今まで



体験してなかった私という意味では、まさに新しい世界に入ってしまった私への発見と
いうのかな……。

河野 自分の体が、今までしなかった動き方をするのがすごくへんてこなんですよ。自分の体をこういう面白い形でとらえた歌人というのはあんまりいなかったような気がするのですね。

小池 そうですね。そういう点でやはり際立っているわけですよ。こういうのはいかにも写生とか写真と言われるとよくわかりますね。

老いの自覚

河野 いろいろ歌をたくさん挙げてきましたけれども、二宮冬鳥さんのを小池さんが挙げていらつしやるけれど……。

小池 二宮さんも亡くなっちゃいましたけれども、私は好きな歌人でした。久留米の方でお医者さんをしていた人です。最後まで構成の行き届いた歌をつくられましたね。

歯科の椅子に横たはりつつ思ひをり

右の眦より涙が出てる

これは別に悲しいから泣いているわけでも何でもないですよ。年をとってくと、人間の体って意味なく涙が出たりすることがある。歯医者さんの椅子に座っていたら、あっ、おれの体から涙が出ているぞというのがわかったという歌。これもやはり自分の肉体に対する発見です。

河野 そうですね。ちよつと緩んでくるから涙が出たのでしょう。これね、「思ひをり」でしょう。「思ひをり」が結構面白いですよ、これ。それから「出ている」は、客観写生ですよ。「思ひをり」というところにしみじみいろいろなものが入ってくるんですよ……。

小池 まあそこはいろんなところを入れて読めますね。それから「右の」なんて指定がね。

河野 若くて生臭い体を持っているときには、情動というのかな、情念が先走りしますけれども、ある年齢に入ってくると、自分の体を距離を持ってながめているんですよ。そういう特徴がありますね。

小池 特に佐太郎はそうですね。若いうちから老いの歌をうたう。この歌、確かに六

十ぐらいではなかったかな。でもすごい年を感じてでしょう。

ひといきにビールのむとき食道の衝撃にも老いて弱くなりたり

これはよくつかんでいるよね。つまり若いうちはガーッと飲めるといふんですよ、年をとつてくると食道にビールの衝撃を受ける。

小池 植村玲子さんというのは、私たちの仲間の『短歌人』の人で、七十ちよつとかなと思ふ。

三十代にて逝きたるイエス老人の思ひを解つて下さいませ

ちよつと意表をつかれますよね。イエスキリストというのは神様ですが、三十代で死んじゃったといふんです。あんな老人の思ひなんてわかつていふのかと、イエスに問いかけていふ。植村さんはクリスチャンなんだね。そういう問いかけでイエスを新しく詠み直している。

河野 神としてより人間として見ていふんでしょ。やっぱ若さといふのは、どうしても幅が狭いから、その辺の物足りなさといふのを感じられたんでしょね、こ

れは。

小池 なかなかすごみがあるんだよね。

老いの美・老いのすごさ

河野 次は森岡貞香さんの八重桜の歌ですけども。

小池 森岡さんは、もう私は大好きな人です。老いというのが一つの美といふのかな、衰亡していくものの持つていふ美しさがあるんですよ。それを森岡さんは作品の中でつくつてこられたといふ感じがする。だからどの歌をとつてもすこくつややかで、何か不思議な色気といふのか、何かあるのね。

「高尾」といふのは、東京の高尾山。そこに桜が咲いていふから見に行こうかなと思つたよといふ歌ですよ。

高尾までことしの八重ざくらのおとろへを見にゆかむとて思ひ立ちし日

まことに名人芸でこの波長の不思議な崩れ方の中に、艶といふのかな、そういうものがフワッと立つてくる。

河野 いい歌ですね。「八重桜のおとろへを見にゆかむ」なんてだれも言わない。普通

は「八重桜を見に行く老いた私は」とつくんですよ。それを「八重桜のおとろへを見にゆかむ」といふふうに表示してくるのは、小池さんがおっしゃったように、衰微していくものの時間とともに変わっていくものへの思いでもあるし、そのものだけが持つていふ、ある美しさといふのかな、ある感じといふものなんですよ。それをまた、「思ひ立ちし日」なんていふふうに結句に持つてくるあたり……。

小池 破格ですよ。

河野 普通はね、「衰えを見にゆかん」といふふうにならないうんですよ。ところが森岡さんは、「思ひ立ちし日」までつけるんですよ。それがうるさくないんですよ。

小池 そうです。

河野 森岡さんは助詞と助動詞が溶けながら続くんですよ、空間的にも。その芸がちよつと真似ができないんですよ。

小池 それは達成でしょう。

河野 それから百歳近い窪田空穂。その歌に、

四月七日午後の日広くまぶしかりゆれゆく如くゆれ来る如し

四月七日の午後の日差しを見ています
すが、その日差しが揺れていくようでもあ
るし揺れてくるようでもあるという。この
下の句の「ゆれゆく如くゆれ来るご如し」
というような、大変自在というのか、感じ
というものは、年齢を考えて読むと、こう
いうところに行くのかなという気がして、
これは大変好きな作品なのです。

小池 穏やかな歌ですね。若々しいね。

河野 「ゆれゆく如くゆれ来る如し」なんて
いうのが、ほぼ百歳でこれができるんです
ね。「年をとると感性が鈍くなる、物忘れが
激しくなる」って、言いますが……。

小池 そこを突破すりゃいいんだね。確か
に感性は鈍くなると思いますよ。斎藤茂吉
みたいな世界がそこまで来ているかもしれ
ないね。

河野 それをね、面白い言葉がパツと浮か
ばないことを、みんなは感性が鈍くなった
と言うけれども、あれは違うんだと夫の永
田和宏が言うんです。感性が鈍いのではな
くて言葉の来方がちよつと遅くなっただけ
の話である。だからそこをうまく利用すれ
ばいいと言っていましたけれども、よくわ

かるような気がする。

小池 はい、よくわかります。

河野 そうでしょう。感覚が鈍くなるん
じゃないのよ、あれは。

小池 すごい印象深い言葉をしゃべるから
ね。一言がドスンと飛んでくるようなこと
を言うんだよね。

河野 お年寄りというのは、存在自体が不
思議でもしろいから、ちよつとまた別物
になるんでしょうね、きつと。そういう人
が言う言葉だから、普通の言葉でも違うふ
うに聞こえるんですよ。

小池 ジャ最後に裕子さんの有名な歌を
ちよつと解説していただませんか。

風に向かひ風に屈みて歩みつつむか
し老女だつたやうな気がする

河野 何だろうな、これは。生命が円還し
ている……。

小池 円還している感じかな。輪廻とい
うのかな。年をとるって、我々すごい直線的
に考えるでしょう。若いときから真っ直ぐ
行つて年とつて、その先には死があるとい
うふうに。でも多分それは違う発想があつ
て、ぐるつと回つていて、何か死の向こう

にもう一つ誕生があつて、こう来ているよ
うな、大きな輪廻の中で自分の今があると
いうような、そんな感覚の方がすごくリア
リティがあるね。

河野 というか、何と申すんでしょうか。
自我だとか、いろんなものからどこか逃げ
るんでしょうね。例えば自然というのは循
環しながら同じところを回っているわけで
しょう。循環しながら螺旋を描きながら上
のほうへ登っていく。そういう自然の歩み
というのか、時間の動きみたいなものが、
どつかで自分にも重なるような気がするの、
年をとりながら。多分そんな感じじゃない
かなと思います。自分のつくつた歌のこ
との説明は難しいです。多分その辺じゃな
いかなと思つてすけれども。

小池 では一応こんなところで。(拍手)